

懸命に生きる

「中米・エルサルバドル、グアテマラ」

エルサルバドルの首都サンサルバドル郊外、ネハパ市のゴミ捨て場。見渡す限りゴミの“海原”は25ヘクタール(甲子園球場の六倍)もあるという。トラックの荷台に積まれていた馬の死がいも、手袋とマスク姿の男二人が大きな穴に投げ捨てた。地面を覆っていた無数の鳥が一斉に飛び立つ。息が泊まるほどすえたにおい。風が吹くと、砂ほこりとゴミが吹き上げられ、目を開けていたられない。

首都が毎日吐き出す1500トンのゴミに、子どもから高齢者まで約10000人の男女が生活の糧を見いだす。学校に行けない子どもたちが金になる缶や瓶を拾い、マングローなどを見つければその場で口に入れる。

中米一を誇る近代的ショッピングモール、メトロ・セントロから車で十分の距離。繁栄と貧困が隣り合わせの現実、グアテマラ、ニカラグアでも同じだ。

中米各国は一九六〇年代から九〇年代

差、それを暴力的に支える独裁体制、そして東西冷戦の代理戦争の場となり、内戦が続発した。ニカラグアではサンダニスタ革命による社会主義国家の成立と崩壊。エルサルバドルの悲劇は米国人のオリバー・ストーン監督が映画化したし、ホンジュラスやコスタリカは、米国のニカラグア介入で国土を戦場の一部として使われた。最後まで続いたグアテマラ内戦は、九六年の停戦までに死者20万人を出した。

九六年で中米の内戦に終止符が打たれたが、どの国でも紛争の原因の大きな一つ、土地改革は手つかずだし、貧富の差を生む社会体制は変革の兆しもない。エルサルバドルもグアテマラも市場経済を優先させ、富裕層はますます豊かになり、貧困層は依然苦しい。中南米はこのネオリベリズム(新自由主義)一色だ。

そのひずみは社会的弱者の子どもたちをむしばむ。グアテマラの首都グアテマラシティーのはずれで十歳くらいの男の子が一人、接着剤の入ったポリ袋を手に入れた。目はうつろ、話しかけても反応がない。路上で生活する子どもたちはシンナーを吸うことで、疲れも、空腹も、寂しさも紛らわせている。

問題解決の見えない社会はフラストレー

ションをため込んでいる。「こんな小さな村にも警察署ができました。スリや強盗などの犯罪が急増しているからです。昔は、貧しい者が貧しい者を襲ったりしなかったのに……」。エルサルバドル北部の山村で、十年近くコミュニティ再建のボランティアをしている米国人女性、ブレンダさんは嘆いた。

都会の中路上で懸命に生きようともがいている子どもたちは、警察官の拳銃、自営する商店主のマチエテ(山刀)や鉄拳に怯えて暮らす。長年の内戦で大人たちは暴力に不感症になっている。「救世主の国」を憂鬱は募るばかりだ。

写真キャプション

市場の片隅で物売りに疲れ、段ボールに入って寝込んだ男の子。サンサルバドルでゴミの山からテレビの部品をおもちゃにして遊ぶ女の子。「マリア、5歳」といったグアテマラシティーで。

悪臭漂うゴミの山で金目の物や食べ物を探す男の子。サンサルバドル・ネハパ市で